

スペシャルインタビュー



東北大学災害科学国際研究所
教授(所長) (1989年 東北大学大学院博士課程修了)

今村 文彦

PROFILE

いまむら ふみひこ ●主な専門分野は津波工学、津波防災技術開発、津波数値解析を始めとした流体波動数値解析、津波被害調査など。津波数値モデル移転国際プロジェクト(TIME)責任者。東日本大震災復興構想会議検討部会、中央防災会議東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会、宮城県震災復興会議などのメンバーである。



自らの夢を実現するために
雑音に惑わされない強固な意志をもとう。

震災の現地調査に参加した
体験がその後の進路を方向付けた

山梨県の出身ですが、同級生のお兄さんが東北大学工学部にいたのがきっかけで、東北の気候風土や土地の人々の人間性に魅力を感じて進学しました。

今こうして思い返すと、地学ゼミでアンモナイトの発掘に参加したり、家庭教師のアルバイトに行ったり、経験したさまざまなことが記憶のなかから次々に甦ってきます。

なかでも、もっとも印象深いのは、大学院の修士課程まで6年間続いた寮生活。当時はすでに下火になっていた学生運動に参加している人や飲み会の好きな人など、実に個性的なメンバーが集まっていた。皆で笑いながら語り合う時間も楽しかったのですが、とくに「日本はこのままでいいのか」と、熱く意見を出し合って、自分自身と社会の将来を真剣に考える先輩方の姿には、多くの刺激を受けました。

河川工学や海岸工学に興味をもって学

び始めた私が、防災に関する研究に足を踏み入れるきっかけとなったのが、大学4年時に起きた日本海中部地震です。震災の一週間後、秋田で行われた現地調査に参加することになったのですが、学問・研究と私たちが営む日々の生活との接点を自らの身をもって実感しました。

大学院に進む頃には、スーパーコンピュータが導入され高度な計算ができるようになり、より正確な津波の予測などが可能になりました。過去の地震や津波の数値シミュレーションを通じた再現実験と予測。それらを毎日のように繰り返した日々が今の私の土台を形作ったのです。

三陸沖で地震や津波が長年続いてきたという地理的要因に加えて、トレンドに流されず知見を積み重ねてじっくり研究を深化させてきた東北大学の姿勢。その二つが融合して、東北大学災害科学国際研究所(IRIDeS通称:イリディス)という本格的な取り組みにつながったのは、当然の流れと

言うべきかもしれません。

人々の生活に役立つ
実践的防災学をさわめたい

大学院を修了して工学部の助教授として研究を続けていた1993年に起きた北海道南西沖地震。これもまた、津波による被害の恐ろしさを、私が再認識する出来事でした。東日本大震災以前は、一般の人々の認識でも「津波」より「地震」に対する関心のほうが高い傾向にありました。それで、命を守るために「津波からの避難行動」に対する関心を喚起することが、重要なテーマの一つでした。

研究成果を社会に還元するべく情報を発信し、実際にそれを役立ててもらいたい。当時からの私の願いが形になったのが、IRIDeSの取り組みとも言えます。

この研究拠点は、東北大学の組織における文理の枠を越えた7部門37分野が集結したもの。災害と防災に関する研究と一

Fumihiko Imamura
SPECIAL INTERVIEW



「みんなの防災手帳」はIRIDeSの活動成果の一つ。被災者の声を活かして、配布する自治体独自の情報を掲載するなど、実用性を高めている。



研究で蓄積された知識と災害の教訓を、実践的な形で模擬体験できる被災訓練プログラム「SENDAI CAMP」を仙台市内で開催。地元の産官学連携によって実現した。



口に言っても、自然災害の発生や被害、災害対応、復旧・復興、将来への備えまで、一連のサイクルに沿って、それぞれにおける事象を研究する必要があります。

そのため、理学、工学、地学、心理学、情報学、経済学、医学、歴史学など、多岐にわたる分野のさまざまな専門性を有する研究者がそろっているのが大きな特徴です。社会や暮らしのなかで役立つ「実践的防災学」を掲げて、包括的な知見を活かし、被災地の復興と災害に強い社会の構築に貢献することを目指しています。

実践的防災学の具体的な形としては、住民が自発的に参加して行う避難訓練などがあります。誰と一緒に避難するか、どのルートを通るかなど、現場に身を置いて動きを各自が考えて行動することで、より実践的な避難行動が習慣化されます。

東北から世界へ 震災の教訓を発信する活動

IRIDeSが掲げる実践的防災学は、いわば「社会や生活に寄り添って深める」学問です。暮らしのなかで役に立つ防災知識や科学的知見を地域の人々の生活に浸透させていくことが大切。そのためには、自治体や住民との連携が不可欠です。

一昨年の秋から施設を新しくしたIRIDeSですが、今後は建物の1階を情報展示ギャラリーとして開放する計画を立てています。ここではシンポジウムなども実施する予定。市民、研究者、行政がそれぞれの観点から意見や情報を活発に出し合って交流できる場を目指しています。

これまでも、自治体との連携協定や、研究情報を住民に発信する工夫など、実践的防災学を展開するための枠組みを構

築してきました。復興はこれからが正念場ですので、自治体や企業などと力を合わせて取り組みをさらに推進していきます。

例えば、一昨年9月下旬に仙台の中心部にある公園で開催した「SENDAI CAMP」という被災訓練プログラムも、行政や企業、市民団体との連携で実現したものです。

参加者対象は、児童やシニア層に比べて避難訓練などに参加する機会の少ない20代と30代前半の人たち。そのため、宿泊被災体験プログラムだけでなく、非常食をおいしく食べるための講座、被災訓練ゲーム、心のケアとしての音楽ライブなどを加え、若い世代が気軽に参加しながら模擬体験できる試みを行いました。

このような被災体験をされた方の声を反映したプログラムを通じて、東日本大震災の教訓が全国に、そして世界へと発信され

る活動を続けたいと思っています。

さらに、2015年3月には国連防災世界会議が仙台で開催されました。会議は、今後15年にわたる世界の防災の指針（仙台防災枠組）を決める重要な場になりました。国連に加盟する187か国、国際機関、NGOなど、のべ15万人が集まりました。

よりよい未来をたくり寄せるのは 出会いを今後に役立てる姿勢

震災の教訓や研究成果を世界へ紹介していく取り組みは「発信力」が物を言います。この発信力は、あらゆる社会的行動において必要不可欠なものであり、物事の成否を左右する能力であると言えます。

今の東北大学の学生は、授業態度や勉強に取り組む姿勢はとて熱心だと思います。その一方で、自らの考えを印象的に伝えるように提案する、あるいは研究などの成果を効果的に伝え理解させる仕組みを作るといった独自の創意工夫に、もっともつ

意欲的であってもよいのではないかと感じることがあります。

ですから、私が受け持つゼミでは、グループ研究の成果発表の場やディスカッションになるべく時間を割いて、学生たちの発信力強化に力を入れています。

就職活動もまた、発信力が結果に大きく影響するものです。ありとあらゆる情報があふれ、雑音まで否応なく耳に入ってくる時代になってしまった今、よけいな情報に惑わされて自分の望まない選択をしてしまう、ということもあるかもしれません。

しかし、強い発信力の源泉となるのは、自らの信念であり、思いを貫こうとする確固たる意志です。これがなければ、難局を乗り切るのには難しいでしょう。

雑念を断ち切って、自らの気持ちに素直に従って力強く行動するには、コツがあります。それは、たとえわずかな時間でもかまわないから、一日の終わりに「振り返り」の時間を、一日の始まりに「計画」の時間を必ず

もつこと。いずれも、私自身が毎日繰り返し実践していることです。

どんなに忙しくとも、5分や10分の時間をつくることはできるはず。雑音を遮断し自分の内面と向き合って心静かな時間を過ごせば、何をすべきかが見えてくるし、新たなアイデアや活力がわいてきます。

大震災を経て、東北は多くの地域や国の支援を受け、新たな絆、ネットワークを得ました。肝心なのは、それを今後の復興にどう活かすか。皆さん一人ひとりの将来に関しても、就職活動で出会った人の縁をどう活かすかが、とても大切だと思います。